

# 発達障害事例

保育所、幼稚園、小中高等学校の巡回相談などにおいても心理職は専門的な援助者として期待されています。現在、通常学級でも不適応を起こしている ASD や ADHD、あるいは LD への理解と適切な支援方法の伝授が期待されています。乳幼児期から支援者との出逢いに恵まれず、本人も発達障害についての自己理解がないまま思春期となり二次障害や不登校が起こるケースはあとを絶ちません。中には、気がつかないうちに、いじめに巻き込まれている場合もあります。現在、乳幼児期から発達障害の診断がついていない段階でも集団行動などの様子から適切なアセスメントを行い、学習支援、生活支援、親支援などを含め、支援ニーズに応えるという幅広い領域の専門性を求められる、心理師にとって、現在、最もニーズの高い分野といえます。ここでは、児童領域における発達障害の子どものアセスメントと適切なコンサルテーションについて、および心理職の関わりについて、事例を通してみていきます。

## キーワード

- 自閉スペクトラム症
- ASD
- 二次障害
- いじめ
- 自傷

## 自閉スペクトラム児への適切な関わりと支援に関する事例

スクールカウンセラー（以下、SC）の立場から自閉スペクトラム症（以下、ASD）のある児童に対するコンサルテーションとしての関わりを紹介します。

### ケース 1 男児中学校1年 Aさん

Aさんは愛情深い両親と、小学校5年の弟の4人暮らしです。小学生までは明るい性格で、友人関係も良好で成績もクラスの上の下くらいでした。中学生になると、1学期から登校しぶりが多くなり、元気がなくなりました。夏休みが近くになると、周囲の友人から、からかわれることが増え、授業中に大声で叫び、教室を出て行ってしまうことが増えました。クラス担任は英語の3年目の先生で生徒指導に熱心です。集団行動から、しばしば逸脱するAさんの様子が気になるものの、発達障害の知識がほとんどない担任は、Aさんの行動が自分の指示を守らないことが多いことから、問題行動の多い困った生徒と考えています。

母親にAさんの突飛な行動について、聞いたところ、最初のうちは、

「小学校も学年が変わると、こういうことはよくありましたから、気にしないでください。うちでは特に問題はありません。」と話したため、安心していました。しかし、その後、逸脱行動はエスカレートをしていき、その様子を母親に電話で伝えると、急に黙り込み、切られてしまうそうです。さらに、担任が電話をしても、返事は途切れてしまい、だんだん電話にも出なくなったということでした。

そうしているうち、Aさんの行動は、授業中、質問と答えがかみ合わないとき、クラスの皆に笑われ、休み時間、すでにできあがっている仲良しグループの中に飛び込んで、自分の話題を一方向的に話すなどの様子が頻繁にみられるようになりました。周囲の生徒がAさんをからかい、仲間はずれにする様子もみえはじめ、担任はそのたびに生徒指導してみるものの、一向におさまる気配がありません。Aさんは、ロッカーに隠れたり、窓から飛び降りる動作をしたり、自分の手をシャープペンシルで刺すなど自分を傷つける行為もみられるようになりました。この出来事をどう対応したらよいのか担任は管理職にも相談していますが、学校は困りはてSCに相談しました。

### 見立てと対応

Aさんは小学校の頃は成績も優秀で、知的には問題がないはずでした。しかし小学校からの支援に関する情報は何も引き継がれておらず、その時代に困ったことがあったのか、中学校の担任は知ることはできませんでした。小学校では幼い頃からAさんのことをよく知る友人に恵まれていたようです。

しかし中学校では複数の小学校から集まる新しい友人に囲まれ、大きな環境の変化でAさん自身、コミュニケーションなどにおいて強いストレスを感じていることが考えられます。中学校での新しい友人はAさんの特性を理解していません。小学校の頃は親友がAさんを守っていたと考えられますが、お互いに勉強や新しい友人関係づくりに忙しい時期です。

まず担任に本人の様子を聞いてみることにしました。「Aさんは、いわゆるKY。空気が読めなくて、冗談で言ったことに真面目に怒ったり、質問の意図とかみ合わないことがある。英語では、文字のdとbをよく間違える。自分と話すときの距離感も近すぎて、びっくりすることがある。毎日、小さなことでも騒ぎばかり起こして、正直自分もへとへとです。」と話していました。「先生、Aさんがお休みするとクラスは落ち着きますか?」と本音を聞いてみると「正直、Aさんが休むとほっとします。どうやって指導しているのか、わからないのです。」と担任の訴えを聞くことができました。

学校長、学年主任、クラス担任、教科担任、養護教諭、SCで話し合い、Aさんは診断がついていないもののASDの特性傾向があることを話し、それを前提に診断を勧め、関わる教員全員に対して、ASDの生徒への基本的な支援方法の伝授、保護者へのカウンセリングを提案しました。

ASDの特性からくる突飛な行動には、すべて理由があること、特性は矯正しようとするのではなく、Aさんの存在、彼なりに頑張っている気持ちを尊重すること。自分を傷つける行為は、自分の気持ちをわかってもらえないこと、自尊感情を傷つけ、仲間はずれになることからくる二次障害で自傷行為に発展しつつあり、学校全体で協力してほしいことなどを願いました。

まずは、母親に幼少期からの子育て不安や悩みなど話を聞くために来校を促すことにしました。母親との面談には、養護教諭とSCが同席し、困り感を聞いたところ幼児期か

ら1人違う行動をすることが多く、子育てをする大変さに涙されました。また、Aさんへの対応の仕方に苦慮していることを、すべて母親である自分の努力で頑張ってきたこと、実は鬱で精神科に通院していることを話されたので、学校としても母親の相談にのっていくこと、Aさんは子育ての責任ではなく、医師に相談し、発達検査を受けた方がよいということを伝えました。

担任には、ASDの特性を伝えました。すなわち視知覚の検査をしてみないとわからないが、空間認知には違いがあり、左右が反転して見え、遠近感がつかめないことがあること。言葉だけの説明、特に曖昧な指示や抽象的な概念はわかりにくい。なるべく具体物を使いモデリングするようにお願いしました。予定変更を急にすること、その場で自由にグループをつくることなどは苦手なので、事前に担任の先生方が先に伝えておくように配慮をお願いしました。

また疲れすぎたとき、空き教室など1人で休める静かなスペースをつくるようにしました。クラスの間人間関係についても放置するといじめに発展する可能性が高いので、すべての先生に対して、積極的にAさんの近くで周囲の生徒に話しかけるようにお願いしました。周囲には、Aさんのことは個性的であるが、本人なりに、がんばっていること、自分の気持ちを言葉にすることが苦手なだけで、丁寧にコミュニケーションをとれば大丈夫、本当はAさんはきみと友達になりたいのだよ、と場面に応じて周囲の生徒に伝えること、先生自らが生徒の前でよい声かけやサポートを、さりげなくやってみせるようにお願いしました。